

徳田秋江

夏目漱石

夏
目
漱
石

いやしくも文壇の空気を呼吸して生息していながら不忠実と申そうか、はた無礼と申そうか、正直な話が小生はその実漱石先生の著作は首尾徹とおして読んだものは二つか三つにすぎない。それなら漱石先生の著作が面白くないかというに決してそうではない。小生は幸か不幸か、当節は漱石派のものが下火で、自然派のものが羽振はぶりが好いからと言って、自然派のものでなければ夜も日も明けぬというように、都合よく小生の趣味を狭く閉塞する自

由を持たぬ。自然派のものだつて愚作もあれば悪作も少くない。その愚作悪作を歴々ありありと承知しながら、「これは佳作」などと公言して憚らぬほど小生は量見が大きくない。ちようどそれと同じように漱石先生のものにも劣作もずいぶん少くない、が佳作もまったくないではないように思う。

可否は世評に任す。小生が漱石先生の作で、最初に通読したのが確か「ロンドン塔」であつた。その幽鬱悽愴なる四辺の光景と、幽鬱悽愴なる光景を表わすロンドン塔が真まのあたり面存せる二十世紀初頭の時世とを、作者が英国

歴史文学等によつて得たる知識の主観に照らして一種の
ヴィジヨナリイに描いた点は、他ひとが何と理屈けなで貶しても
小生には興味がある。もちろん小説というものであるか
ないかは関係せぬ。その次に通読したのが「カーライル
博物館」これはなおさら小説的ではないが、一種の随筆
として決して面白くないものではなかつた。衆愚文明の
喧騒を厭う神経質のカーライルが二階三階としまいには
天井裏まで登り詰めて地上の響を避けるのも面白い。こ
こでちよつとエピソードを入れる。二月十六日の「読売
新聞」の日曜付録に石井柏亭先生が岩野泡鳴先生にする

論中にこういうことを言っておった。

「私は近ごろ日本における自然派の運動に同情する。漱石氏のいわゆるせっぱ迫つまった小説の美点はかなりに認められているつもりだ。しかしながら一を挙げて他を貶おとしされてみると反感が起つてくる。云々」

小生もその点は石井先生に賛成する。むやみやたらに党力を用いて圧倒的に、はた日本の帝国議会の増税案のように多数決をもつて貶おとしされるのを傍はたで見ているは仮よし多数党という以外に、一般ゼネラルにそのほうに真理が多くあつてもそこは一つ石井先生のいわゆる反感的になつてみる

気にもなる。一般にこそ自然派のほうが最近の文学的真
 理に叶っていてもいようが、インディビジュアル個々には自然派の作物がこと
 ごとく可いとは言えぬ小山内薫先生の「手」などが新年
 の作物では好いということだが好いかもしれぬが、それ
 が好いのなら漱石先生の「ロンドン塔」などは数等好い。
 これは「手」が文章の点においてやや漱石張りであるの
 みならず、手ならず、塔の内部なら内部を論緒にして種々
 な回顧幻想に耽ける点の類似から思い付いた小生の引例
 だが、「手」に比べて一方はその強さにおいても凄さに
 おいても大きさににおいてもはた価値においてもズツト勝

れている。

なにとぞ党派根性を插まらずに公平に見て上げようではありませんか。ねえ多数党先生諸賢！

さてその次に小生が通読したのが「草枕」これもむろん面白い、文章は通達だし、詞藻は豊富だし、趣味も津津有味として尽きない。

石井先生がまた同じ論中にこういうことを言っている。

「近世^{モダニズム}人はその包容するところ自然派よりも広いのである。今の自然派諸氏が近世人であると同じく、

漱石氏も虚子氏も 鏡花氏もまた近世人であると

思う」

ここだて！ ○○先生などに言わすれば、生粋の自然派は三四人にしかすぎない。いな先生は一人にすぎない結論に得て落ちやすくなつてくるが、味噌（汁）の味噌臭きは上味噌にあらず。○○先生を並味噌と申すのでは毛頭ない！ それは別問題だが、少くとも漱石先生の「草枕」の中にはその近世人の影が点々と散在しているのは争われぬように思うがいかな。「非人情云々」「出世間的云々」がすでにその辺から発しているのだが一つ二つ

例を挙げれば、

……汽船、汽車、権利、義務、道徳、礼義で疲れ果てた後、すべてを忘却してぐっすりと寝込むような功德云々……

二十世紀に睡眠が必要云々

婆さんは幾年の昔からじやらんじやらんを、数え尽くいで今日の白頭に至つたであらう云々

それよりもっと適切な例は

………画をかくのも面倒だ、俳句は作らんでもすでに俳三昧に入っているから、作るだけ野暮だ。読も

うと思つて三脚几に括りつけてきた二三冊の書籍もほどく気にならんこうやつて、煦々たる春日に背中をあぶつて、椽側に花の影とともに寐ころんでいるのが、天下の至樂である。考えれば外道に墮ちる。動くと危ない。できるならば鼻から呼吸もしたくない。昼から根の生えた植物のようにじつとして二週間ばかり暮してみたい。

小生どものように生活ライフに疲労を感じずるものは、この趣味もある。が、小生があると言つたとして、それを具象的に表現した肝心の作物がないから仕方がないが、正宗白

鳥先生の作などにはずいぶんこの意味の思想が隠見する。強烈とそうでないとの区別、また全体の空気にも相違はあるが、要するに漱石先生もいわゆる自然派と等しく近世人である。幾年の昔から「じやらんじやらんを数え尽して白頭に至った婆さんを」あわではどうも溜らないと焦りはせぬが、漱石先生もやはりそういうことには目の付く近世人である。

小生が通読したのは恥かしながらこれだけしかない。「猫」は二三度読みかけたが止した。「虞美人草」は新聞に掲載中一二回読んだきり。「坑夫」もそうだ。

これは余談だが、しかし漱石先生の評判には最も必要なことだ。それは先生があゝの不平な大学を退き朝日新聞に入つて高給を得る得意の地に立つたという噂が喧騒せられてから先生の評判は下つたようだ。先生の実際の作物が下つたのであるうか。先生の作物を忠実に読まぬ小生にはそこはなんとも言い兼ねるが、それがどうも疑わしい。世の中はずいぶん軽薄だ、また嫉妬も強い小生どものように、最初から先生をオバエスチメートルせぬものは仮よし先生が年俸を何千円取られるようになったからとていまさらべつだんにアンダースチメートルする気にも

なれん。しよせん文壇も「非人情」ばかりでは通らぬと見える。どうもこの辺が衆愚の社会に対する骨^{こっ}だて！

(二月二十八日夜)

日本文学電子図書館

夏目漱石

著 者 徳田秋江

制作者 宮澤一郎

底 本 「漱石全集 別巻」角川書店

昭和42年10月10日 5版発行

日本文学電子図書館